

## 1. 研究の目的

地域社会における過疎化と少子高齢化が進行する中、日本各地の農山漁村の限界集落化とその消滅が叫ばれている。集落の存続や活性化において集落出身の他出者やその U ターン、地域おこし協力隊や移住者の I ターン、ボランティアの地域づくり団体等に期待が寄せられている。そうした集落のコミュニティの核であり、また人々の結びつきの重要な機会となる集落の祭礼や民俗芸能もまた同様に存続の危機にある。祭礼や民俗芸能は当該の農山漁村から他所へ移住した他出者が定期的に集落と関わり続ける重要な機会であり、また移住してきた I ターン等の人々や、集落の存続を支援しようとするボランティアが集落の住民と協力し、また集落の慣習や文化を継承する機会でもある。したがって他出者や移住者、ボランティア等が地域の祭礼・芸能にどのように関わっていくかは、祭礼にとどまらず集落やその文化の継承において非常に重要な意味を持つものであり、実際にそれらの継承の担い手となることが住民からも期待されている。

しかし従来の祭礼・芸能研究では、地縁・血縁とは異なる外部からの新規参加者の存在に注目する一方で、そうした外部からの参加者以上にむしろ地域社会で期待されている、そうした他出者の参加やそれが果たす役割、またその参加を可能にすることを前提とした祭礼の構造の変容について論じた研究は極めて少ないのが現状である。また一方、農村社会学等の分野では、徳野貞雄らの限界集落論の文脈において、全くの外部からの参加者の限界と他出者の重要性が指摘されてきたが、他出者を扱った研究は農作業の手伝いや福祉的なサポートといった点にのみ注目が集まり、祭礼・芸能に関して、さらにそうした関わりを可能にする要因やそこでの他出者にとっての意味まで踏み込んだものは極めて稀である。

本研究では現在、過疎化にともなって継承が危ぶまれている農山漁村の祭礼・民俗芸能において、地元住民、地元出身の他出者、U ターン・I ターン者、ボランティア等がどのように協力しつつ継承を可能としてきたのか、また祭礼・芸能がそうした継承のしくみの変容を通していかに再構築されていくのかについて分析したものである。そのことを通じて、少子高齢化が進む地域社会における住民・他出者・移住者等・ボランティア等が取り結ぶ関係性と、そうした関係性を媒介するメディアとして祭礼や民俗芸能が持つ可能性を討究する。

応募者はこれまで参与観察とインタビュー調査に基づき、祭礼における担い手間のコンフリクトとそれを通じた祭礼の再編成に関する研究を行ってきた (武田 2016, 2017a, 2017b, 2017c)。本研究ではそれを踏まえつつ祭礼・芸能の準備や練習から当日までのプロセスに関する参与観察とインタビューを通じて、上記のような戸惑いや摩擦がどう処理されつつ (あるいは無理に解決しようとしてせずに放置されつつ) 祭礼や芸能が成立するのかを問うことを通じて、集落における住民・他出者・移住者等との関係性やそこでの摩擦や共存のあり方について明らかにしていく。その際に重要な意味を持つのは住民・他出者と移住者等の間で仲介的な役割を担う住民や、移住の促進や地域活性化を目指す組織の人々である。彼 (女) らが両者の不満や抱える課題をどのようにとらえ対処するのか、またそうした仲介役を活用しながら両者がどのように協力していくことができるのかについて、具体的な事例を手掛かりとして明らかにしていく。

## 2. 研究の対象

本研究では現在、過疎化・少子高齢化にともなって継承が危ぶまれている農山漁村の祭礼・民俗芸能において、地元住民、地元出身の他出者、そして外部からの移住者・ボランティアなどがどのように協力しつつその継承を可能としてきたのか、また祭礼や民俗芸能がそうした継承の仕方の変容を通してどのように再構築されていくのかについて分析を行った。そのことを通じて、限界集落における住民・他出者・外部からの移住者・ボランティア等が取り結ぶ関係性と、そこで祭礼や民俗芸能が持つ可能性について討究する。

本研究では、祭礼や民俗芸能の実践において、住民・他出者・移住者やボランティア等との関係性において何が具体的に問題になるのかについて具体的に調査を行うために、その準備から実際に行われる当日までのプロセスについて、自らもボランティアとして参加しつつ参与観察を行うと共に、住民・他出者・移住者等、そして移住を促進する地域づくり団体等へのインタビュー調査を行う。それによって①住民・他出者・移住者やボランティアにとっての祭礼や芸能の意味づけ、②住民・他出者・移住者やボランティア、地域づくり団体などが祭礼・芸能の準備や習得において直面する課題や困難について分析し、ひいては移住者やボランティアが関与する形での集落の存続のあり方や可能性を展望する。

分析対象としては、他出者・移住者・ボランティアの参加が進み、それぞれへのアプローチがしやすいことと、研究への支援体制の整備を前提にしつつ、生業による集落組織の違いを意識して、山村として滋賀県高島市朽木古屋の六斎念仏、漁村として山口県上関町祝島の祝島神舞をとりあげた<sup>1</sup>。高島市朽木古屋の六斎念仏は 2012 年以來、担い手の高齢化と減少により中絶していたが、「朽木の知恵と技発見・復活プロジェクト」の仲介で参加した 7 名のアーティストたちが、2016 年に住民から継承して復活させ、17 年には他出者も継承に加わっている。また山口県上関町祝島の住民は対岸で建設が進められてきた上関原子力発電所に反対し続けてきた。その理念や島の漁業や農業、そして生産物の産直を通じて生計を立てるライフスタイルに共感して島への移住を希望する人々を受け入れて、神舞でも重要な役割を任せている。

なお上記のうち上関町祝島については、2018 年・19 年には神舞が行われず、2020 年が予定されていた。2016 年度の参与観察記録をもとに 2018・19 年にインタビュー調査を中心とし、その後 2020 年の 3 月以降に準備を含めた参与観察・インタビュー調査を行う予定であった。しかしながらコロナウィルスの流行により 2020 年の神舞は 2 月に中止が決まり、2021 年に延期され、また自治会による決定として島外からの来訪者の訪問について遠慮してもらおうという方針が決定している。そのため 2019 年までの調査結果による報告となる。また朽木古屋の六斎念仏も 2020 年は住民のみによる小規模な奉納にとどめることとなり、アーティストを含めた集落外からの参加は行われなかったこととなったので、2019 年までの調査に基づくデータが中心となっている。

---

<sup>1</sup> なお農村集落として、阿蘇市一の宮町手野のおんだ祭りについても調査を行ったが、当初の想定とやや異なり、ここでの集落については隣接した南阿蘇村に比して必ずしも他出者やボランティアに頼らざるを得ない状態ではなく、むしろ熊本市中心部に自動車ですぐアクセスということもあって、やや今回のテーマとしては適切でなかったことが判明したため、参与観察調査のみにとどめた。

これらの調査を通して本研究は、祭礼・民俗芸能という集落のコミュニティの核を手がかりに、①農山漁村の限界集落における住民・他出者・移住者等の関係性と、相互の摩擦やすれ違いのあり方、②摩擦を踏まえた上でのそれぞれの共生の可能性、③摩擦を仲介する人々とその役割、④祭礼や民俗芸能が三者の関係性の構築に持ちうる可能性を明らかにする。

### 3. 研究方法

本研究では、祭礼や民俗芸能の実践において、住民・他出者・移住者やボランティア等との関係性において何が具体的に問題になるのかについて具体的に調査を行うために、その準備から実際に行われる当日までのプロセスについて、自らもボランティアとして参加しつつ参与観察を行うと共に、住民・他出者・移住者等、そして移住を促進する地域づくり団体等へのインタビュー調査を行った。また祭礼・芸能やその組織の歴史的な変容について理解するためにそれらに関する史資料も適宜活用した。

祝島については、筆者も準備段階からボランティアとして神舞にも参加しており、祝島神舞奉賛会や祝島出身の他出者と祝島に関心を持つ島外者のグループである「祝島ネット 21」、また移住者と住民の仲介役や移住者たちとは信頼関係も深い。そうした関係性に基づく支援を受けつつ住民・他出者・移住者への調査を進める。特に住民と移住者との仲介者となっている従来からの住民のうち自治会長の A 氏、「島民の会」の代表 B 氏と副代表の C 氏、島で民宿を営みつつライフスタイル移住者の世話をしている D 氏に対して、ライフスタイル移住者の集落への統合についてインタビュー調査を行った。また筆者が面識を得た移住者 11 名に対しては、2016 年～19 年において、島に移住してきた経緯、島での住居の確保、生計を立てる手段の確保、集落の共同活動への参加、島での生活習慣への適応についてのインタビュー調査を行っている。本報告書で用いられているデータはその際の調査に基づくものである。朽木古屋については「朽木の知恵と技発見・復活プロジェクト」、参加アーティストの武田力氏・タカハシ” タカカーン” セイジ氏、舞踊学を専門とする武藤大祐氏（群馬県立女子大学准教授）と協力し、住民・他出者・アーティストへの調査を行った。

なお助成期間を通じては祝島への 6 回の訪問、14 名の移住者と 6 名の島民への聞き取り、朽木古屋に関しては 4 回の訪問と芸能の稽古および本番の参与観察、20～80 代の継承者 7 名・アーティスト 4 名への聞き取りを行っている。また阿蘇についてもウォルフラム・マンツェンライター教授（ウィーン大学）、ヴィルヘルム・ヨハネス氏（熊本大学研究員、元ウィーン大学講師）などのウィーン大学関係者との共同での祭礼の 2 回の参与観察を行ったほか、ウィーン大学における 5 回の研究報告および共著執筆のための打ち合わせを行っている。研究成果はこれまでに以下のように学会報告や著書（分担執筆）として発表されている。

①（学会報告）Shunsuke Takeda, Succession and Reconstruction of Festivals/Folk Performing Arts in Overaged and Depopulated Communities: Focusing on the Role of Mediator between Inhabitants, out-Migrants, Incomers, and Volunteers, The XIX International Sociological Association(RC03: Community Studies) at Toronto Convention Center (2018 年 7 月 18 日) .

②（学会報告）Shunsuke Takeda, Sustainability of Festivals and Rural Community: Focusing on the Role of Amenity Migrants in Depopulated and Overaged Village, New

Perspectives on the The Digital Revolution: Media and Cultural Transformations, at Hawke EU Center, University of South Australia, Adelaide, Australia. (2018年8月8日) .

③ (学会報告) 武田俊輔「個人化した社会運動ネットワークが支える伝統的集落生活：山口県上関町祝島におけるライフスタイル移住者たちを事例として」第67回関東社会学会大会 (2019年6月8日) .

④ (学会報告) Shunsuke Takeda, Sustaining Rural Community against Nuclear Power Plant: Conflicts and Cooperation between Residents and Amenity Migrants in Iwaishima Island, Japan, The 3rd EAJS Conference in Japan at Tsukuba University (2019年9月14日) .

⑤ (学会報告) 武田俊輔「限界集落におけるライフスタイル移住者の生活戦略：東日本大震災以降の山口県上関町祝島への移住者たちを事例として」第92回日本社会学会大会 (2019年10月5日) .

⑥ (著書 (分担執筆)) Shunsuke Takeda, 2020, Fluidity in rural Japan: How lifestyle migration and social movements contribute to the preservation of traditional ways of life on Iwaishima, in Wolfram Manzenreiter, Ralph Lützel and Sebastian Polak-Rottmann (eds), *Japan's New Ruralities: Coping with Decline in the Periphery*, Routledge:196-211.

#### 4. 調査結果

##### ①祝島神舞

山口県上関町に位置する離島である祝島は、山口県の南東部、瀬戸内海に突き出した室津半島の先にあり、2020年5月現在で世帯数は242、人口約350人、高齢化率は75%となっている。上関は近代以前には瀬戸内海航路における重要な港町として栄えた地域であったが、近代に入って作られた主要な鉄道や道路網からは外れていた。戦前期には水産業と海運業を中心として発展したが、戦後は陸上交通による輸送が中心となったことで衰退した。

現在の上関町、そして祝島の状況を考える上で重要なのは、1982年に浮上した中国電力による上関原子力発電所建設計画である。上関町長とその与党議員、また商工会議所などの地域経済団体は、原発の建設による地域経済の活性化、さらに国からの補助金や中国電力からの寄付金による地域振興が可能になるとして、誘致に賛成してきた。これに対し原発から発生する放射性物質や事故のリスクを批判する反対派も少なくなく、町長選挙における反対派候補の得票率から考えて、現在でも町民の1/3は反対派と推測することができる。

特に原発が建設される田の浦地区の対岸、わざか3.5kmに位置する祝島では、計画が表面化して以降、農業・漁業を営む住民による「上関原発に反対する祝島島民の会」(以下「島民の会」)を中心とした根強い建設反対運動が36年にわたって行われてきた。祝島住民における反対派は約9割といわれている。祝島と田の浦の間の海域は、瀬戸内海でも有数の恵まれた漁場であり、祝島の漁業者たちからは原発から排出される温排水によって海水温度が上昇し、漁場が破壊されることに対して強い批判があった。さらに1990年代以降、「原発の金に頼らない島おこし」として漁協婦人部による水産物の加工と産直販売、また農業では無農薬で生産するビワの成果を都会の消費者グループとタイアップして産直販売し、さらにビワの葉によるびわ茶を特産品として開発し、販売するといった取り組みが進んで

いる（山戸 2013:34）。無農薬で有害物質を含まないことで、環境保全に関心の高い都市の消費者に受け入れられている農産物の販売を継続するためにも、原発の建設は阻止しなくてはならないと住民たちは考えている。

こうした島の住民の活動は 2000 年代後半以降に SNS を通じた島外の反原発運動の活動家たちによる発信、そして反核の立場からドキュメンタリー映画を制作している映画監督の鎌仲ひとみによる映画『ミツバチの羽音と地球の回転』、そして祝島島民のライフスタイルを描いた瀬瀬あや監督の『祝の島』という 2 本のドキュメンタリー映画が 2010 年に上映されたことによって、自然環境保護や脱原発運動に関心をもつ全国の人びとに知られるようになった。

特に 2009 年以降、中国電力による建設予定地の埋め立て工事が開始されて、住民によるそのだに阻止行動が行われた時期には、活動家たちがブログでの情報発信、YouTube・Twitter での実況を行い、それによってそれまで全く個人的な結びつきのなかった活動家たちが島民に協力して阻止行動に参加するようになっていく。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と原発事故によって、中国電力に対して山口県知事による埋め立て工事中止が要請され、それ以降、工事は中断されている。

SNS を通じた活動家たちの情報発信や映画を通じて、2009 年以降知られるようになった祝島は原発事故以降、30 年間にわたって原発建設を阻止し続けた島として、数多くのマスメディアにもとりあげられた。また「原発の金に頼らない島おこし」という理念やそれに基づいた島づくりの活動、島の伝統を守る祭りなどにも関心が集まった。こうしたなかで都市部からの島への移住に関心をもつ人びとも現れ、現在では住民のうち約 30 人が、2009 年以降にライフスタイル移住、すなわち経済的理由というよりは村落における農業・漁業を中心とし、都市では実感できないような自分たちの生きがいを重視したライフスタイルを求めて移住した、島民の孫世代としての移住者あるいは「I ターン」を選んだ 30 代～50 代の移住者たちである。

祝島神舞は 4 年に 1 度、夏のオリンピックと重なる年の 8 月 16～20 日にかけて行われる祭礼である。この祭りの起源をめぐる伝承は以下のとおりである。仁和 2 年 8 月に豊後国伊美郷の住人が石清水八幡宮より伊美別宮八幡宮を勧請する帰途に、海路で嵐に会って祝島の三浦湾に漂着し、そこに住んでいた 3 軒の民家に助けられた。島では五穀がなく、島民は草木の実を拾って生活していたため、伊美から地神荒神を勧請し、それ以降島でも五穀を栽培するようになった。以後、そのお礼にと、島民は毎年 8 月に伊美別宮社に「お種戻し」に欠かさず参拝し、また伊美別宮社よりその社人が 4, 5 年に一度（現在は 4 年に 1 度、夏のオリンピックの年と重なる）来島して、荒神に神楽を奉納するようになったとされている（山口県文化財愛護協会 1978:50）。

祭礼の進行は以下のとおりである。8 月 16 日に伊美を出発する三隻の御座船（神様船）と呼ばれる神船に乗る神職・里楽師を、祝島側から權伝馬と呼ばれる船をはじめとする奉迎船で迎えに行く。三浦湾で荒神を祀った後、本浦と呼ばれる集落の前の湾に向かい、大漁旗で飾った数多くの奉迎船を従えて湾内を 3 度回る。その間、声に合わせて權伝馬の前後にはサイヘイ・ケンガイと呼ばれる舞い手が船の上で舞う。陸ではシャギリ隊と呼ばれる一行が、太鼓・三味線といった鳴り物で神船を迎え、仮神殿で鎮座祭を行う（入船神事）。

2 日目～3 日目は「岩戸神楽」と呼ばれる岩戸神話に基づく神楽が行われる。3 日目は大

歳講という、神社内の荒神の祠への舞の奉納が行われる。「祈願神楽」と呼ばれ、各戸からの家内安全や海上安全などの祈願を行い、4日目は神角力と呼ばれる演目を中心とした「夜戸神楽」、最終日に「出船神事」として、神船と權伝馬・奉迎船は再び本浦を3度回り、サイハイ・ケンガイが舞う。

### 移住に至る動機とプロセス

次に祝島への移住者について論じたい。祝島へのライフスタイル移住は、もちろん住民の反原発運動や島づくりの理念と密接に結びついている。2009年の建設予定地の埋め立て工事に反対して、住民たちが埋め立て予定地の海上に漁船でバリケードを張って抵抗活動を行っていた。これ以前から島民と連携して原発建設反対運動を行っていた、山口県在住のシーカヤックのインストラクターが、カヤックで海に出て、埋め立て工事を妨害する活動を開始していた。YouTube や Twitter での実況を通じて祝島の状況を知った20代～30代の若い活動家たちは、彼が所有する数多くのカヤックを借りて反対運動に参加するようになる(山秋 2012)。住民たちの好意で、彼らは2011年3月に工事が中断するまでの間、祝島に滞在して生活を共にするようになった。

それ以前、島民が連携していた原発反対派は社会党・共産党といった政党や労働組合、また主婦を中心とした反原発運動団体などであった。そうした組織的なバックグラウンドをもたず、個人として自由に運動に参加する若い活動家たちと接したのは、住民にとっては初めてのことであった。それまで島にルーツをもたない若者に接することがほとんどなかった住民たちはこれがきっかけとなって、祝島を訪れる原発反対の意識を持つ島外の若者たちに対して好意を持つようになっていった。このことが、その後増加するライフスタイル移住者を島民が受け入れるようになる下地となっていった。その際に仲介役を果たしたのは自治会長でもあり長年反対運動を続けてきたA氏、反対運動の住民団体である「上関原発に反対する島民の会」の代表を務めるB氏、またその中心メンバーであるC氏、また島外からの活動家や祝島に関心をもって訪れる人々が泊まる民宿の経営者であり、そうした人々との間に広範なネットワークを持っているD氏の4名である。

もちろん「はっきり言うけど、原発に反対しません、推進ですって [いう人なら]、わしら絶対受け [いれ] ん。こっちははっきりしとる。どうでもいいです、そんなものは、言うたら、ほんなんお前らのこと知らんで、わしは、ってはっきり言って、極端に言えばそうなる」<sup>2</sup>というように、移住者が受け入れられるのは、住民と一緒に原発建設に反対してくれることが前提である。島の人びとも近年の移住希望者の増加の理由を、「[移住するようになった理由の] 根っこは反対運動じゃろうと思うんですよ。『祝の島』とか、『ミツバチの羽音と地球の回転』とか、ああいうのを観て来られてるという。それと反対運動の方がほとんどですね」<sup>3</sup>というように、原発建設に対する批判的な意識、また反原発運動から始まった住民による島づくりの活動への共鳴によるものとして受け止めている。

### 原発建設反対運動への参加を通じた移住

---

<sup>2</sup> C氏へのインタビュー (2018年3月6日) による。

<sup>3</sup> A氏へのインタビュー (2018年2月24日) による。

こうした移住者たちが移住を決めた経緯や理由について見ていこう。移住者のうち、直接に原発建設反対運動がきっかけとなって移住したのは、E氏（男性、20代）、F氏（男性、30代）とその妻G氏（女性、30代）とその子ども2名、H氏（40代、男性）とその妻I氏（40代、女性）と子ども2名、である。いずれも移住する前には祝島に地縁・血縁はない。まずは彼らが移住に至った経緯について論じる。

E氏は2009年に東京都内の大学に進学したが中退している。自分で関心のある社会問題についてインターネットなどで調べているうちに、9月に東京で行われた原発建設に反対する社会運動のイベントで祝島のことを知った。それまでに社会運動への参加経験は全くなかったが、イベントで講師をしていた活動家に頼み込んで連れてきてもらい、埋め立ての阻止行動に2年間参加した。当初は自分が用意したテントで生活していたが、反対運動を続けたことで住民からの信頼を得て、食事や住まいの世話をしてもらった。それ以外の生活費は、全国から祝島に寄せられたカンパで賄っていた。東日本大震災後に工事が中止されてからは、E氏の今後の生活を心配した住民たちが島に移住するように勧めてくれて、移住を決めたという。現在は東京から彼女を呼び寄せて結婚し、子どもも生まれている。また現在は両親も呼び寄せて生活している<sup>4</sup>。

F氏はもともと東京や名古屋でレゲエを中心とした音楽活動をクラブで続けていくなかで、エコロジー志向の他の活動家たちと親しくなって、自らも参加するようになったという。祝島の建設反対運動には2008年2月から関わり、島を何度も訪れてD氏と親しくなっている。2010年に名古屋で行われた生物多様性条約第10回締約国会議の際には、祝島から名古屋までを徒歩で歩きつつ、上関原発建設問題について訴える活動を他の活動家たちと行っていた。2011年2月には音楽活動を通じて知り合って結婚したG氏と共に、田の浦での抗議行動に3週間参加している。この間に、A氏・B氏・C氏といった反対運動の中心メンバーとも親しくなっている。その後は山口県内で大工や水道工事の仕事などを転々としたり、農地を借りて農業を行ったりしていた。祝島に来る前はドーナツ屋を2年間経営していたが、仕事が忙しくすぎて健康を害したこと、またG氏や子どもたちとの時間も取れないことから地方への移住を考え始めたところ、D氏の提案で祝島に移住することになった<sup>5</sup>。

H氏は2008年、西日本各地で音楽活動をしながら放浪しているときに、反原発運動や核汚染といった社会問題に関心の高い人が集まる広島市内のバーで、祝島の反原発運動の写真展を開いているカメラマンを通じて祝島のことを知ったという。その後、田の浦の埋め立て工事を実況する活動家のYouTubeに衝撃を受けて、音楽活動を続けながら、シーカヤックに乗って埋め立て工事の阻止活動に加わった。工事中断後は各地で再びライブ活動を始め、また同じようにシーカヤックで活動していたI氏と結婚してカフェを開き、祝島を含めた環境志向の強い農産物・海産物の販売も行っていた。その後、祝島の反対運動により積極的に関わりたいと考えて、家族で祝島に住むことを決めて移住した<sup>6</sup>。

J氏（男性、30代）・K氏（女性、30代）の夫妻は2010年に祝島に移住している。彼

<sup>4</sup> E氏へのインタビュー（2016年8月11日）による。

<sup>5</sup> F氏へのインタビュー（2018年2月22日）による。

<sup>6</sup> H氏へのインタビュー（2016年8月19日）による。

(女) からも H 氏と同じようなタイプの経歴を経ており、日本各地のクラブをあちこち移動しながら音楽活動を続けていて、そうした場で環境問題の活動家たちに接し、祝島の反原発運動についても知るようになった。また音楽活動と並行して、農地を借りて農業をしていた経験もあり、農業に関する知識が豊富である。F 氏夫妻とは祝島に来る前からクラブでの活動を通じた友人であった<sup>7</sup>。

戦後日本における代表的な脱原発運動は原発立地での住民運動、左派系の労働組合運動、また子どもたちの健康被害を危惧する主婦たちによる運動の 3 つであるが (町村・佐藤 2016)、ここで挙げた人たちはいずれも地域や組織に基づくこうしたタイプの運動とは関わりをもってこなかったし、またそもそも地域にも組織にも属してこなかった。職業経験がなかった E 氏を別にすれば、F 氏・G 氏・H 氏・I 氏・J 氏・K 氏は音楽活動を続けながら地域を移動し続け、またブルーカラーの仕事を中心にさまざまな職業を転々としている。祝島の問題について知るようになるのは、東京・名古屋・京都などで原発問題や環境問題について、活動家が語る機会を設けているカフェやバー、またそうした活動家が集まるクラブやライブハウスといった場であり、また活動家の YouTube における運動の実況中継を通じてであった。

こうした移住者たちの経歴は、個人化・流動化が進んだ現代社会における社会運動が、集合的アイデンティティや組織によってではなく、音楽を通じて皆でリズムをとるような身体的なコミュニケーション、映画や演劇を見に集まるといった限定された空間におけるコミュニケーションによる経験の共有に基づくという、McDonald が提唱する「経験運動」の概念を想起させるものである (McDonald 2002)。こうした移住者たちは、カフェやクラブハウスのような場において出会い、音楽活動を共に脱原発に関するイベント、また YouTube などで発信される映像などを共有し、語り合うことを通じて経験を共有するなかで、祝島と接点を持ち、建設反対運動に参加するに至っている。このように祝島に移住しているのは、個人化社会の中で地域社会や会社・学校・労働組合といった組織やそれに基づく運動にもともと属していなかった人びとなのである。

### ライフスタイルの見直しを理由とした移住

このように直接に自身が運動に関わったことがきっかけとなって移住した人々もいるが、上に挙げた以外の祝島への移住者は、自然環境の豊かな農村での生活を求めて移住しており、その多くは東日本大震災がきっかけとなっている。幾つかの例を挙げて説明しよう。

L 氏 (女性、50 代) とその夫 M 氏 (女性、50 代) は、子ども 1 人と共に 2012 年の 2 月に祝島に移住した。2 人とも被災地で会った宮城県の仙台市出身で、祝島にはもともと地縁・血縁はない。震災当時は首都圏に居住していた。L 氏は専業主婦、M 氏は大学を出て大手メーカーにエンジニアとして勤めていたが、過労と会社内の人間関係にも悩んでうつ病になり、早く退職したいと考えていた。2 人には震災による被害はなかったが、それまでの都市的な生活に不安を感じ、自然の恵みを大切にする田舎の暮らしが大事だと感じるようになった。ちょうどその時期に L 氏が祝島についての報道番組を見て惚れ込み、M 氏もい

---

<sup>7</sup> J 氏へのインタビュー (2018 年 3 月 6 日) による。



ずれ仕事を辞めたいと思っていたことから、3人で移住することに決めた<sup>8</sup>。

N氏（女性、50代）とO氏（男性、50代）は子ども3人と共に祝島に2012年に移住している。北海道札幌市でコーヒー店を開いていたが、やはり東日本大震災と原発事故に不安を感じ、田舎への移住を検討するようになった。その間、報道やドキュメンタリー映画を通じて祝島を知り、祝島に出入りしていた活動家から北海道から出身地の祝島に戻って循環型農法による農場を経営していた人物を紹介されて相談し、また自治会長のA氏とも連絡をとって、A氏と話し合っただけで移住を決めたという<sup>9</sup>。一般に、ライフスタイル移住者として論じられるのは経済的に比較的豊かな中間層の場合が多いが、祝島への移住者のなかで中間層であったといえるのは、L氏・M氏の一家とN氏・O氏の一家のみである。

インタビューを行った中で、上記以外の人びとはいずれも祝島に血縁がある。P氏（男性、30代）は広島県生まれで、母方の実家が祝島である<sup>10</sup>。夏休みになると母に連れられて島に頻繁に来ていた。広島の大学で建築学を学んだが、建築関係の仕事に就くことはなかった。飲食店でフルタイムの料理人として働いており、東日本大震災と原発事故を経験して、東京では生活できないと思うようになったという。祝島に母親がUターンして食堂を営んでいたし、自分も子どもの頃からよく知っている場所と言うことで、2011年に祝島に移住することを決めた。同様に2011年に移住したQ氏（男性、40代）は代々祝島出身の家で父親が島を長年離れていたが、Uターンして農業を営んでいた（現在は再び島を離れている）。Q氏自身は北海道生まれで空港で働いていたが、長時間労働と職場での人間関係に悩んで、父親に相談して祝島に移住することに決めたとおいう<sup>11</sup>。またR氏（男性、30代）も母方の実家が祝島で子どもの頃はよく家族で遊びに来ており、2012年に移住した。大工や土木工事の経験、また結婚式場やホテルでカメラマンとして働いた経験がある<sup>12</sup>。

こうした人びとはいずれも都市での生活や長時間労働に終われるライフスタイルを見直し、自然に囲まれた環境を求めて祝島に移住している。1990年代後半以降の日本企業ではグローバル化時代の資本主義に即した雇用形態の転換として、雇用の流動化が進んだ。特に若年層において男性の正社員を中心とした終身雇用の職は減少し、低賃金の非正規雇用に就く者が増加した。そうしたなかで、若年労働者の方も企業への忠誠心や所属意識を強く持たず、低賃金や長時間労働といった環境の中で比較的容易に離職を決断するようになっていった。日本社会におけるリキッド・モダニティが進行し（Bauman 1999）、終身雇用という安定的な制度とそれに対する個人の依存という状態が崩壊して労働が個人化する中で、個人のライフコースの選択が多様化した。地方への移住もそうした選択肢の一つとして選ばれており、非正規雇用の仕事を転々としていたF氏・H氏・P氏・Q氏・R氏などはいずれもそうしたなかで祝島に移住している。

移住者たちにとって、都市での生活は「社会人になってくそみそに働いて、働いても働いてもローンの支払いとか家賃の支払いで手一杯で、遊ぶ暇もないのに、周りに欲望の塊があ

<sup>8</sup> L氏・M氏へのインタビュー（2016年8月18日）による。

<sup>9</sup> N氏・O氏へのインタビュー（2018年2月23日）による。

<sup>10</sup> P氏へのインタビュー（2018年2月22日）による。

<sup>11</sup> Q氏へのインタビュー（2018年2月22日）による。

<sup>12</sup> R氏へのインタビュー（2018年3月7日）による。

ってっていう生活って、すげえつまんない」<sup>13</sup>（P氏）、「空港の仕事は荷物の検査とかだけ、キレられる仕事。人から感謝されることがない。自分のおった会社で自分が辞めてもなんの影響もないんですよ」<sup>14</sup>というように、低賃金、長時間労働、仕事のやりがいのなさゆえに魅力が感じられない。さらに都市での生活について、これからどんどん下の階層は生活が苦しくなると考える移住者もいる<sup>15</sup>。それに対して祝島では、「ほぼ自分が社長みたいなもんじゃん。やりたいときに仕事やって、やることやってれば[島の住民に]認められて、社会の歯車として自分がやればやっただけ認められるけど、ダメなところはダメってダイレクトに評価される。それが楽しくて、田舎生活は魅力あると思う」<sup>16</sup>、「島に来たら、何でもないことでもすごい感謝されるし、すごい必要とされるんですよ。もともと自分はでかいところで歯車になるより、小さいところで重要な存在になった方がいい」<sup>17</sup>というように、自分の存在価値や生きがいを見いだせると彼（女）らは感じているのである。

### 移住者たちの生計とライフスタイル

こうして移住した人々は、どのように生計を立て、またどのように集落の行事に参加し、また余暇を過ごしているのだろうか。

まず移住者の仕事は主に4種類に分けることができる。すなわち①農業・漁業といった第一次産業、②大工や左官といった建築関係の仕事、③島内でのインフラに関する仕事、④島内・島外でのサービス業である。この4つのいずれかを兼業することで、多くの移住者は生計を立てている。以下、順を追って見ていこう。

まず①農業・漁業を移住者が本格的に始める場合、教えてくれるメンターが必要である。原発建設反対運動の中心メンバーが、農業・漁業について基本から教えてくれる機会は多い。住民の3/4が高齢者で引退する者も多いなか、「いずれは若い人に世話にならなくてはいけないのでねえ、ここへずっと生活する以上」<sup>18</sup>というように、島に移住してきた人びとは今後の島を支える労働力であり、また原発建設への反対運動への参加という点でも期待されているためである。例えばE氏は移住してすぐに、島の女性たちにびわ茶の製法を教えてもらった。またE氏は島でヒジキ漁とその加工・販売をする女性から、ヒジキの採取方法・加工方法を教えてもらい、その下でアルバイトをして経験を積んだ。その後、独立して家族とともにびわ茶とひじきの製造・販売を営んでいる。ヒジキ漁を漁師に教わることから仕事を始める移住者は多く、H氏・J氏・P氏・Q氏も同様である。またE氏・P氏・J氏はヒジキ以外にもワカメやテングサといった他の海藻の採集・加工・販売も行っている。

②の大工や左官についてはF氏やR氏のように移住以前に経験のある者、またP氏のように学生時代に建築を学んでいて、ある程度の経験がある者もいる。また全く未経験だったE氏についても、大工をしているC氏に弟子入りして仕事を覚えさせてもらうとともに、仕事の一部を譲ってもらうことで収入を得ることができている。島では「別に家一軒建てれ

---

<sup>13</sup> P氏へのインタビュー（2018年2月22日）による。

<sup>14</sup> Q氏へのインタビュー（2018年2月22日）による。

<sup>15</sup> Q氏へのインタビュー（2018年2月22日）による。

<sup>16</sup> P氏へのインタビュー（2018年2月22日）による。

<sup>17</sup> Q氏へのインタビュー（2018年2月22日）による。

<sup>18</sup> B氏へのインタビュー（2018年3月6日）による。

んでも、改造とか、ちょっとした仕事が多い」上<sup>19</sup>、住む人が誰もいなくなった空き家の解体の仕事も少なくない<sup>20</sup>。このため常にある程度の収入を得ることができるという。

③は運送業や港湾荷役の仕事、また水道の管理やゴミ処理の仕事で、島で数少ない安定した現金収入を得られる仕事である。例えば H 氏は島内のゴミ収集の仕事で月に 3 万円の収入を得ていた。また P 氏は島の 70 代のお年寄りが務めてきた水道管理の仕事を引きつぐことになり、それで毎月の現金収入を得ている。N 氏は港で船のチケットを販売する仕事をしており、M 氏・O 氏は港で荷物の運搬業務を行っていた。①・②は 40 代以下の移住者がほとんどだが、③はむしろ 50 代以上にみられる。これは島の住民が 50 代以上の移住者が農業や漁業、大工を始めるのは難しいと考えていることによる。

④は多岐にわたる。最も成功しているのは N 氏・O 氏夫妻によるコーヒー店の経営である。もともと北海道でコーヒー店を経営していた 2 人は移住の際にも焙煎機を持ち込み、移居前から行っていたコーヒー豆の通信販売を続けている。2015 年からは島でコーヒー店を開き、住民や観光客、島を訪れる活動家から現金収入を得ている。L 氏は島のお年寄りからの要望でパンを作って販売しているほか、介護士の資格を取って高齢者の訪問介護の仕事を行っている。中には、現金収入を島外で稼ぐ移住者もいる。例えば F 氏はかつてドーナツ屋を開いていたことから、島外でのイベントに露店を出してドーナツを販売して、その時期に現金収入をできるだけ稼いでいる。また R 氏は島外で年に数回、カメラマンの仕事を行うことで 50~60 万円を稼ぐほか、今後は祝島の特産物であるタイなどの高級魚の島外への販売を目指して活動している。

こうした①~④を兼業して移住者は現金収入を得ているが、その金額自体は決して多いものではない。例えば夫婦で稼いでいても「収入は全体としては年に 100 万円もない」<sup>21</sup>のが普通である。それでも生計を立てることが可能なのは、日常の生活費が極めて安くすむことによる。まず住居については、移住の希望者に対しては、自治会長の A 氏、また「島民の会」の中心メンバーである B 氏・C 氏が中心となって所有者に安価に家を貸すように交渉し、移住希望者と所有者とを仲介して、移住希望者に対して住む家を斡旋している<sup>22</sup>。家賃はゼロ、最大でも 1 ヶ月に 5000 円程度と極めて安いことが、移住者がこの島で生活していくことができる重要な要因の一つとなっている。

また食料についても、移住した直後には「野菜とか結構貰ったりしてますけどね。魚と大根とかひじきは貰ってますね。それだけでかなり助かりますよ」<sup>23</sup>というように、住民運動の中心メンバーや他の移住者が分けてくれることが多い。またもともと、高齢になっても農業や漁業を続けている住民が多く、金銭を媒介せずに日常的に互いに収穫物を交換し合う互恵的な関係性が集落では成り立っている。そうしたなかで高齢者を助けたりして、集落の内部で役に立つ存在として認められていけば、日常的に食料を分けてもらえる機会も少なくない。「買わなくても、ただ自分が親切にしてあげるだけで食べ物が入ったら、こん

---

<sup>19</sup> C 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 6 日）による。

<sup>20</sup> P 氏へのインタビュー（2018 年 2 月 22 日）による。

<sup>21</sup> H 氏へのインタビュー（2016 年 8 月 19 日）による。

<sup>22</sup> A 氏へのインタビュー（2018 年 2 月 24 日）、B 氏・C 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 6 日）による。

<sup>23</sup> F 氏へのインタビュー（2018 年 2 月 22 日）による。

な幸せなことではないですよ。それでお礼まで言われてですよ。[中略] たったこれだけ、電球取り替えただけなのについていう感覚なのよ。それが田舎の、お互いが提供し合うっていうコミュニケーション」<sup>24</sup>というように、魚や野菜、海藻については入手しやすい。

このように住居費・食費があまりかからない生活環境を築くことができさえすれば、移住者たちの生活費は「下手したら、月 5 万稼げりゃあどうにかなっちゃうっていう。携帯払って、電気、ガス、水道払って。食費なんかは大してかからない」<sup>25</sup>という程度に抑えることができる。

もちろん住民たちとの間にそうした日常的な助け合いの関係を築くためには、集落の伝統的なライフスタイルに慣れなければならない。「移住者たちにとってまず難しいのは、緊密な人間関係。何もかも筒抜けやからね。朝起きるのが遅いとか、全て分かっってしまうし、[住民に] 注意される。そういうのがうるさいから、煩わしくて嫌やっていう人もいると思うんですけど、そういう人はまあ住めない」<sup>26</sup>、「祝島はやっぱり集団生活と一緒にやけんね、こういう離島というのは。うちのうち、よそはよそ、いうわけにはいかんからね。お互いが理解し合わんとね。そういうのもないと、どうしてもおりづらくなるよね。プライベートがないくらい感じ」<sup>27</sup>と住民たちはその必要性について述べる。そうした深い付き合いができずに、祝島を去って行った移住者も 30 人程度いるという<sup>28</sup>。

さらに集落全体で行う伝統的な行事、例えば集落全体で行う消防訓練、海岸の清掃や道路整備などの行事、また原発建設反対運動に対しても、島の貴重な働き手である若者として頑張っている姿を住民に示すことも、重要である。「島ぐるみでやることには、ああいうのには参加せにゃ駄目じゃね」<sup>29</sup>というの、祝島で生きていく上での条件である。

また、移住者たちが定着するためには、住民のなかで役に立つとして認められるような存在になることも重要である。例えばそれまで島になかったコーヒー店を開いた N 氏・O 氏夫妻については、「産業として貢献してくれてる。それこそ祝島の人も助かるし、よそから来た人も。それでちゃんと本人もしっかりしとるしね」<sup>30</sup>というように、島の住民たちから役に立つ存在として明確に認められている。彼のような何か生計を立てるための技術を持っていない移住者の場合、「島民たちが世話だけして、集落にとって負担になるばかり」<sup>31</sup>であるからだ。

ただし島に来てから農業・漁業・大工などの技術を習得して、住民の役に立ち、また生計を立てられるようになってくれるのであれば、それで問題はない。ある移住者は「[住民と] コミュニケーションが取れることによって、こういう仕事を教えようとか、若いから教えようとか、相手が [移住者である自分の] 存在意義を提示してくれるというか。『山 [=畑] でもこういう仕事やってみようか、海[での仕事]でもやってみようか』って教えてくれる。

---

<sup>24</sup> D 氏へのインタビュー（2018 年 2 月 23 日）による。

<sup>25</sup> R 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 7 日）による。

<sup>26</sup> D 氏へのインタビュー（2016 年 8 月 7 日）による。

<sup>27</sup> C 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 6 日）による。

<sup>28</sup> C 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 6 日）による。

<sup>29</sup> C 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 6 日）による。

<sup>30</sup> C 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 6 日）による。

<sup>31</sup> D 氏へのインタビュー（2016 年 8 月 7 日）による。

ひじきにしてもビワの仕事にしても」<sup>32</sup>と述べている。例えば大学を中退して何の技術もなかった E 氏はそういうタイプの移住者であり、力仕事などで住民をできるだけ助けるなかで大工やヒジキ漁の技術を教えてもらい、生計を立てられるようになっていく。

このように伝統的なコミュニティになじみ、人間関係が密接で互恵的な社会のなかに埋め込まれていくことが、移住者として祝島で生きていくために必要となっている。

### ライフスタイル移住者を支える島外の活動家ネットワーク

上で述べたように、祝島においてうまく社会の一員として認められるようになれば、現金収入は少なくとも生活していくことが可能である。しかし特に子どもを持つ夫婦にとっては教育費の面からより多くの現金収入が必要だ。さらに現金収入を得られる仕事が増えることで、島出身者が帰ってくることも、新たに移住する人も増やすことができる。そうした将来を見越して、移住者たちは住民たちと協力しつつ、現金収入を稼ぐことができるように事業を拡大しようとしている。

その場合、従来からの第一次産業の仕組みそのままでは、サステイナブルな形で仕事を続けていくのは困難だ。1990年代に U ターンして大工と漁師を兼業してきた C 氏は、漁師を続けることについては「厳しいのは厳しいよ。魚価が下がったもんね。魚の値段は下がり、燃料代とかああいうのは全部高騰していくから。魚価だけぐっと下がるんだだけ、もう無理よね」<sup>33</sup>と述べる。例えば R 氏によれば、タイは日本では高級魚の代表として知られているにもかかわらず、漁師が加入する漁業協同組合を通して販売すると 1kg につき 300 円にしかならない。漁師にとっては漁に出るほど赤字になるため、漁師の数は大きく減少している<sup>34</sup>。R 氏は現在、祝島のタイをブランド化して付加価値を付け、島外に通信販売することを目指している。しかし魚のブランド化を進めて島外に販路を拡大する上では、定期的に一定の量が必ず確保できなければならず、漁師の減少が障害になっている<sup>35</sup>。島には多くの海産資源があるが、労働人口が減少する中では十分に量を探ることができないのが現状である。

そうしたなかで、移住者たちは島にあるさまざまな農産物・海産物をどのような販路を通じて販売しているのだろうか。その際に重要な意味をもっているのが、第 3 章で論じた移住者の多くが経験している、島外での音楽活動や社会運動を通じた個人的・流動的なネットワークである。移住者たちは、ライブハウスやクラブ、環境問題に意識的なカフェやバーでのイベント、Facebook・YouTube・Twitter といった SNS を通じて祝島のことを知るようになったことは既に述べた。そうした移住者たちは移住後も時折、島外に出て音楽活動を行うこともあり、また SNS を通じて移住前に親しくなった音楽家や環境問題の活動家たちと継続的に関わりを持ち続けている。

例えば J 氏・K 氏夫妻は海藻類を採集・加工し、島外に販路を見つけて出荷している。彼は祝島に来る前に、音楽や環境問題に関する活動を通じてベジタリアンやヴィーガンの人びと、またそうした人びとに対して専門に食品を売る信頼できる取引先との間にネットワークができていて、そこに商品を卸すことができるし、ロコミを通じて販路も広がってい

<sup>32</sup> P 氏へのインタビュー（2018年2月22日）による。

<sup>33</sup> C 氏へのインタビュー（2018年3月6日）による。

<sup>34</sup> R 氏へのインタビュー（2018年3月7日）による。

<sup>35</sup> C 氏へのインタビュー（2018年3月6日）による。

く。E氏とその母親も環境問題に意識的な社会運動のネットワークを活かして、ヒジキ・フノリといった海藻類、びわ、びわ茶といった農産物を中心に販売を行っている。

また島にある物産を新たな資源として発見し、販売するきっかけを見つける上でも、「びわの蜂蜜がすごい高価な価格で、パティシエの中でも貴重な蜂蜜とされてるみたいで、そういう話聞いたりして。周りに知り合いがいるといろんな情報になって、何かのヒントになる」というように、「外との人脈って大事」<sup>36</sup>であるという。このように、販路の開拓や新たな島内の資源の発見という意味で、移住者たちが関わってきたネットワークは重要な意味を持っている。こうした社会運動のネットワークは必ずしも大きなものでなくてもよい。既に述べたように、集落の生活を続けていく上では多額の現金収入を必要としているわけではないし、現在の労働人口では大量の農産物・海産物を安定的に供給できるわけではないので、こうした小さいネットワークを通じて販売する方が向いている。

祝島でそうしたネットワークを創り出す拠点として重要な役割を果たしているのは、D氏が開いている民宿である。D氏は自分が住んでいる家を、島に関心をもって宿泊を希望する人が安く泊まれるように開放している。現在の移住者たちのうち、E氏・F氏・G氏・H氏・I氏・J氏・K氏はいずれも、移住より前にD氏の民宿に何度も宿泊したり、また頻繁にD氏を訪問して親しくなっていた人びとである。いわばD氏は移住者たちが祝島に移住する際のゲートキーパーの役割を果たしている。そしてD氏は移住者たちが祝島のコミュニティになじんでいく上で必要なことを教える存在でもある。

こうした移住者からの口コミで、環境問題の活動家やライターたちの多くがこの宿に宿泊し、D氏やB氏・C氏などから島の反原発運動や島の活性化に向けた取り組みなどについて説明を受けている。その結果、「うち [D氏の家] はいろんな人が泊まりに来たり遊びに来たりするから、そういう人たちが外で [祝島のことを] 発信してくれる。蜘蛛の巣の中心みたいなもの。でもそれ [ネットワーク] は勝手に [島の外でも] つながっていくんです。すごいややこしいネットワークで、誰がたどってもよくわかんないネットワークなんです」<sup>37</sup>というように、祝島に関する情報とそのネットワークが各地に広がっている。

そしてD氏らから知識を得た活動家たちがカフェやバー、クラブなどで環境問題に関するイベントをしたり、祝島に関するドキュメンタリー映画の上映会などを行うなどの機会には、移住者たちが出荷した祝島の商品が数多く出荷される。D氏は商品を出荷したい移住者と島外の活動家を仲介する役割を担っており、また時には自らも島外に出てそうしたイベントや上映会のサポートをしたり、また講演を行うこともある。なおD氏自身は民宿の経営や自らが行う農業によって島で生計を立てるだけの収入は十分にあるため、D氏自身は移住者たちが商品の出荷・仲介などは無償のボランティアとして行っている。

このように移住者たちは従来の社会運動とは異なる個人化・流動化した不定形なネットワークと結びつき、そこで島の農産物・海産物を販売することを通じて、生計を立てることができているのである。

## 祭礼への参加と仲介者の役割

---

<sup>36</sup> E氏へのインタビュー（2018年2月22日）による。

<sup>37</sup> D氏へのインタビュー（2018年2月23日）による。

ここまで現在の祝島における移住者の状況やそこでの仲介者の役割について述べてきた。移住者の収入の面で、移住者が仕事をする上でのメンター、また自治会を通じた公共的な仕事を手に入れるという面、時にはD氏のような外部への生産物の販売といった面も含め、住民との仲介役となる人々が果たしている役割は極めて大きい。さらに支出面に関しても住まいとなる家をゼロあるいは極めて安い家賃で手に入れるという点でも、さらには金銭を媒介せずに日常的に互いに食料を交換し合う互恵的な関係性に参入していく上でも重要である。さらに移住者にとって島の常識や島内の密接な人間関係に慣れていくのは簡単ではなく、また島のしきたりとかができないからということで批判的な声も必ずあるが、そうした際にもまず言う人は直接本人たちではなく、仲介者に言う。そこから自分が伝えるけれども、逆に移住者の方も仲介者に島の人の問題について言うというように、仲介者をワンクッション挟むことによって、ある程度の円滑な関係性が創りだされている。

こうした島民との関係性を創る上で神舞は移住者たちの集落への社会統合という点で極めて重要な意味を持っていた。それは「祝島への移住者が移住者たちの生計とライフスタイル」において述べたように、集落全体で行う伝統的な行事すなわち「島ぐるみでやること」の最たるものが4年に1回行われる「神舞」であるということ、さらに3.11以後の移住者の増加という状況が始まった直後に、そうした移住者が島で生活していけるかどうか、集落にどのように、またどの程度貢献できるかが他の島民の前に明確に示される機会ともなった。

筆者は2012年・2016年の神舞では、いずれも8月初旬の本格的な準備段階から参与観察調査を行った。神舞の準備自体は自治会とは別組織である祝島神舞奉賛会が主催して、そこから自治会に対して協力が求められ、自治会を通じて18ある各区の組長を通じて連絡が行われ、各区を構成するそれぞれの家から資金・物品・労力の面における調達がなされる。労力面における男性の役割としては主に神舞（神楽）が行われる仮神殿の建設とそのために必要な竹などの調達、大分・国東半島から船で来島する宮司および楽師を迎える權伝馬船の漕ぎ手およびサイヘイ、ケンガイと呼ばれる舞手と太鼓の打ち手が主なものである（神楽は来島する楽師が行う）。女性に関しては仮神殿の建設に必要な菰を各家3枚ずつ供出し、また8月には男性たちが仮神殿の建設に隣接した場所で共同して縄をなう。さらに仮神殿の総称区である切り飾りを作るのも女性の役割であるが、これは近年では男性も参加している。また三味線と太鼓の楽隊を組んで練習を重ねてそれで当日は宮司と楽師の送迎を行うほか、彼らの接待役を務める。

2012年段階でも既にこれらの行事には全て移住者たちの参加が見られたが、2016年と2012年との最も大きな違いは移住者が祭礼において極めて重要な立場を占めるようになった点にある。例えばサイヘイ・ケンガイという島内の男性にとっての最大の見せ場である權伝馬上での舞い手は、初めて島内に血縁を持たない移住者から選ばれた。また仮神殿の建設の際は、仮組みした屋根の上で登って作業を行うのは熟練者が中心となるが、そうした面でも移住者に意図的に任せて既存の住民はサポートに回るという役割をあえてすることが多く見られた。

そうしたプロセスは以下の機能を持つ。「一緒に作業すると買って言うのはすごい大事なんですよ。一緒に作業してご飯食べて、一緒に暮らしてみるとすごくよく分かる。見せちゃ

えばいい。今の自分の実力を見せながらやるとね、相手も分かりやすいんですよ」<sup>38</sup>と D 氏が述べるように、①それぞれの移住者の性格や技術を見極めると共に、今後の祝島での生活共同においてどのような役割を果たしてもらうかについて住民側が見抜き、島内において生業を身につけさせるための指導の足がかりとなっている。それは逆に②また逆に移住者側が島の中で自らの特技を発揮し、島の中でどのような存在価値を示すことができるかを示す場としても機能している。「神舞のときに、終始ある程度先頭に立ってやっていたし。バラシのときにも、いろいろみんな見る目が変わった、みたいなのもあったみたいだし。それでけっこう、『あいつは職人仕事ができるんだ』という認識が変わったというものもあるかな」<sup>39</sup>というように、特に大工等の技能についてはその能力が目に見える形で島民の中に示されることになるため、それをきっかけに島内でその実力が発揮され、仕事を得るきっかけになるということもある。

③さらに「一緒に仕事していくのがすごい大事で。その時にお祭りの準備するのは年寄りが主役なのよ。彼らしか知らないんだから、手順とか。その人たちをお願いします、すごいですねっておだてながら、口だけ出してもらって、身体動かすの僕らやりますって言って、それで丁寧に教えてもらってそれがやりきれたら、やっぱり皆ご苦労さんご苦労さんってなるのよ。そしたらもう、仲間になる」<sup>40</sup>というように、こうした共同作業を通して生みだされた関係性は、その後になって移住者が互恵的な島の共同性に参入する上で重要な機会となっている。「テレビで K 君を映してやってくれと頼んでいるのもそうした流れもある。外から原発に反対するために送り込まれてきたということを使う人が上関にいたりするし、そうした誤解を解いて、島で生活するために一所懸命頑張っているところを報道してもらおう」<sup>41</sup>という形で、あえて移住者をクローズアップさせ、祭りという場において仲介者以外の住民にも移住者の貢献ぶりを広く見せることで、島外だけでなく島内の住民がその存在を受け入れやすくなるように努めている。

このように祭礼という住民全てに対してその姿を示す場において、仲介者が配慮しつつその活躍の場を与えていくことをきっかけとして、これまでに述べてきたような祝島における移住者たちの集落内における社会統合が進んでいったことが 2012 年・2016 年の祭礼を通じて明確に見出される。

## ②朽木古屋の六斎念仏

### 地域と行事の概要

高島市朽木古屋は滋賀県北西部の山間地域、福井県遠敷郡・京都府美山町と接した針畑地域に位置している、標高 700～800m の山々の麓に点在する集落の一つである。冬期は 11 月頃から積雪が見られる豪雪地帯である。生業の中心は山林資源を活用した林業、炭焼きであった。ただし陸の孤島というわけではなく、福井県小浜や京都との交流は歴史的にも盛んであった。昭和 30 年代の燃料革命により炭焼きは急激に衰退し、同 40 年代以降は就労の場を求めて壮年層の人口が流出した（滋賀県民俗文化財保護ネットワーク 2017:3）。現在、

<sup>38</sup> D 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 6 日）による。

<sup>39</sup> R 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 7 日）による。

<sup>40</sup> D 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 6 日）による。

<sup>41</sup> D 氏へのインタビュー（2018 年 3 月 6 日）による。



古屋に居住する人々のほとんどもその時点で一度、古屋を離れており、現在も京都や滋賀県内の平野部と針畑の両方に家を持つ人が多い。2019年時点ではわずか5世帯の集落となっており、冬期には2軒とさらに少なくなる。

六斎念仏は毎年8月に行われる盆行事の一環であり、集落の各家を廻りながら縁先で仏壇に向けて8月14日に奉納される念仏踊りである。踊りは従来は成年男子によって務められてきた。前々日の8月12日には棚経、14日には墓参と施餓鬼、それに六斎念仏が行われる。15日の朝には針畑川の河原で「河原仏」を行う。浅瀬に石と砂利で四角形の島を作り、小石を積んで地蔵を6体立て、島と岸を橋でつないで花を供える。15日の深夜には仏壇の火を河原仏の線香に移し、供え物をする（滋賀県民俗文化財保護ネットワーク 2017:5-6）。踊りは太鼓（=踊り子）3人、笛2人、鉦2人の計7人で行われ、太鼓=踊り子の1人が「親」、残りの2人が「子」となって、踊りの中で掛け合いの形式を取る。装束は浴衣を着て、裸足に下駄を履く。踊り子たちはほぼ終始、中腰の姿勢をとったまま、左手に持った太鼓を大きく振って動かし、右手のバチで叩きながら、陣形を変化させるダイナミックな芸能である（武藤 2019:181）。各家ではまず、「発願」を行い、続いて「おひひやる」「おかさぎ」「みこのまい」「しし」「いってんがえし」「かぐら」という6つのうち一曲を演じた後、「うちあげ」および「ろくだん」を踊り、「後念仏」を唱えて終わる。一軒あたり20分ほどを要し、かつて上流側の家から順に各戸を廻っていた時代には夜から朝までかかったが、2000年頃からは各家を廻らずに玉泉寺の堂内でのみ踊るようになったという（滋賀県民俗文化財保護ネットワーク 2017:7）。ただし2016年の復活後、改めて各家を廻る形式が復活した。

古屋の六斎念仏は1998年に滋賀県の記録等の措置を講ずべき無形民俗文化財として選択され、保存会組織も存在しているが、上に述べたような集落の人口減少の状況により、継承者の高齢化が進行し、2012年には担い手不足により中止されるに至る。保存会のメンバーは昭和30年代～40年代に離村した世代、すなわち2010年代には80代となった世代が大半である。その子ども世代は古屋の外で生まれた者が大半であったため、保存会に加わっているのはわずか1名（50代）である。ただし80代の継承者世代と30代・20代の若者の世代、孫の世代をつなぐではこの50代の継承者の存在が結果的には大きかった。

### 復活に至る経緯と仲介者の役割

こうした状況の中、朽木古屋六斎念仏踊りの継承プロジェクトは、2015年、文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業」を、高島市教育委員会と市内の有志による「朽木の知恵と技発見プロジェクト」が構成する「高島市文化遺産活用実行委員会」とが受託して始まった（武藤 2019:182）。アーティストを従来からの継承者に引き合わせるというアイデアは「朽木の知恵と技発見プロジェクト」の西川唱子が大阪在住のアーティストであるタカハシ“タカカーン”セイジと出会い、タカハシから踊り念仏にまつわるパフォーマンス作品に取り組んでいた武田力を紹介されたことによる。そこから武田とタカハシが古屋で六斎念仏の継承者たちと接触する機会が設けられた。当初、古屋出身者以外が踊ることに抵抗を示し、またせめて朽木地域の子どもの間に教えることを希望していた継承者たちであったが、既にこの時点で六斎念仏が奉納できない状態が3年目になることが確定的だった中、西川や教育委員会の仲介を通じて次第に継承者たちの態度も軟化していったという。11月には「朽

木古屋 六齋念仏を踊り継ぐ」と題して、武田とタカハシの協力のもとに、映像の上映と継承者の話を聞く会が「朽木の知恵と技発見プロジェクト」と教育委員会によって開かれた。

来場者の関心の高さに継承者の側も刺激されて活動が本格化し、2016年度から本格的に復活をめざす取り組みがスタートした。アーティストによるこの2人のネットワークからの参加もあり、その後も継続して参加することになったコンテンポラリーダンサーの斉藤成美やアーティストの Jang-chi らも含めて合計8名が参加することになった。さらに地域おこし協力隊の女性1名が笛で加わっている。そのメンバーが針畑地域の休憩所を合宿所として寝泊まりし、継承者から教わることで踊りを習得していった。交通不便な過疎集落において、この宿泊兼練習場所となった休憩所の存在は大きかった。8月14日には4年ぶりの復活ということでチラシやHPを用いて集落外にも発信が行われ、市内外から100名を超える人々が見学して玉泉寺での奉納が行われ、さらに夜間には各家を廻るという2000年以前の形態も復活した（滋賀県民俗文化財保護ネットワーク 2017:41-43）。

この復活を目の当たりにした継承者の孫世代からは、自分たちこそが今後この行事を継承すべきだという声があがり、翌2017年には孫世代にあたる2名の、いずれも20代の若者たちが稽古に加わり、奉納に参加するに至る。いずれも現在は近隣に在住し、就職している男性である。1人は中学生くらいまでは祖父たちによる六齋念仏を見ていたが、もう1人は一度も見たことがなかった。

稽古ではタカハシ、武田らが1年先行しているため、継承者たちと孫世代の意思疎通を彼らが支える場面もあったという。外部者に刺激されて孫世代が手を挙げるとするのは、継承者たちにとって大きな喜びであった。この年は、かつては作られていたヤマと呼ばれる、軽トラックの荷台にカヤで囲いを作って移動中に太鼓を載せたものも、アーティストや孫世代の力を借りて復活した。またイベント化を避けるために玉泉寺での昼間の奉納はせず、夜間に各家を廻るといったものになった。また2018年には長い間演じられていなかった演目「しし」の鉦の音源がタカハシによってデジタル化と速度調整がなされ、振りについては記憶の定かでない部分をタカハシ・武田が推測して、形にしたことで復活した。このように六齋念仏は2000年よりも更に過去の形態を取り戻し、また再構築する形になっている。なおこの年は盆に玉泉寺での公開奉納を行わなかった代わりに、10月に高島市の朽木やまびこ館大ホールにて、京都市右京区の「嵯峨野六齋念仏」および福井県若狭町の「三宅の六齋念仏」を招いて、3ヶ所の六齋念仏をめぐる実演を観客に披露すると共に、それらの関係性や今後の六齋念仏の継承をめぐる課題についてのパネルディスカッションが行われた。

こうした経過を経て継承者たちからは、今後はタカハシ・武田には指導者としての関わりが期待されるようになっていく（武藤 2019:186-187）。2019年も同様に行われたが、この年は台風により各家を廻ることができず、玉泉寺での夜間の奉納のみにとどめられた。なお2020年はコロナウィルスの流行により中止予定である。

### 継承をめぐる課題①：アーティストと孫世代間の葛藤、「家」の原理からの逸脱と変容

ここまで論じてきたように、古屋の六齋念仏は「朽木の知恵と技発見プロジェクト」および高島市教育委員会が継承者とアーティストをうまく仲介し、さらに継承者の孫世代が加わる形で継承は軌道に乗りつつあるようにも見える。とはいえそのプロセスは決して簡単なものではなかったといえる。実際、この復活自体も西川氏が数年間にわたって継承者たち

に働きかけてきた中で可能になったもので、当初は継承者の中にも「古屋に住んでいない人にどうやって教えるのか」「よその人にこの地域に伝わった踊りを覚えてもらうのはいかがなものか」といった否定的な意見が相次いでいた。その上で武田・タカハシらの「踊りを簡略化したり、自分の好みに変えたりするようなことは考えていない。経費の算段が付けば、古屋に住んででも踊りを習いたい」という意思と誠実な態度によって、このプロジェクトはスタートしている。

近年、東日本大震災以降に見られる動きとして、アーティストが民俗芸能を習うという動きは次第に生まれつつあり（武藤 2018）、武田・タカハシという外からのアーティストを呼ぶという西川のアイデア自体は必ずしも突飛なものではない。ただ本来は盆行事であり、村の中の各家に返ってくる祖霊を慰めるべく仏壇に対して奉納するという、「家」の原理に基づく行事に対し、「村」とともに全くその「家」に無関係な者が参加するというのは、その行事そのものの意味を大きく変化させるものとなりかねない。結果的に 2017 年から孫世代が 2 人加わることで、部分的に「家」の血縁による継承は部分的に行われるようになったが、今後既に高齢となっている継承者たちが次第に行事から離脱していくことが想定される中で、他の「家」から新たに孫世代の参加が今後ない限りは、アーティスト抜きでの行事の執行はそもそも不可能である。またこの芸能が仏壇を前に祖霊に対して奉納するものであることも重要で、墓と仏壇を現在メインとして住んでいる居住地に移した「家」においては現在でも奉納を行っていない。逆に言えばそうした「家」に対しては供養が行われない以上、その「家」から新たな参加者が加わることは考えにくい。あくまで「家」同士を単位として供養し合うという相互性が基盤となってきた行事・芸能だからである。高島市教育委員会や「朽木の知恵と技発見プロジェクト」としては移住者の増加を期待しているが、現状においてはそれも簡単なことではない。

こうした本来の中心的な担い手としての「家」と集落というのは、孫世代の踊り手にとっても微妙な問題である。孫世代の中には「俺らは俺らの集落やから、俺らの理由でやるんや」「俺らが継がんでどうすんねん」というような思いは強い<sup>42</sup>。武田・タカハシらはそのことを意識して、最初から「見せられるもの」としての完成度を高いものにするよう尽力したという。孫世代の 2 人は実際にその完成度を見て、また自分たち自身が稽古してみてもその習得に至るまでの困難さに気づき、先行して習得していた武田・タカハシ、また継続して参加している斉藤成美、アーティストの Jang-chi といったアーティストに対するリスペクトと仲間意識があるのは間違いないが、その一方で「それ以外の人ちょっと」という思いがあることも否定できない面がある。

とはいえ、「何人か、あそこの集落にゆかりがあるというわけではないけども、関わりたいと言ってきた人はいました。ただ稽古日程が合わなかったり。T（孫世代の継承者）さんに言わせると、誘えばやる人はいるみたいなこと言ってるけど、今のところいない」<sup>43</sup>というように、集落の他の家から、孫世代で新たに継承に参加しようとする人は今のところいない。踊り手自体は何とか 3 人まで増えれば踊りとしては成立するが、加えて笛や鉦の同時に演奏が必要である。また彼等と集落にルーツを持つ他の家の孫世代との間に、たとえ墓と

<sup>42</sup> 武田・タカハシへの聞き取りによる（2018年11月16日）

<sup>43</sup> 武田・タカハシへの聞き取りによる（2018年11月16日）

仏壇を移していない「家」同士の者であっても、かつての集落の単位に基づく連帯は今のところ見られないのが現状である。その意味ではアーティストが参加することを前提とした体制は今後も否応なく続くことになる。また継承者の中では今後の指導者として武田・タカハシは位置づけられており、その意味でも孫世代の2人が指導する立場として一本立ちするまでは、アーティストの2人が次世代の指導を今後中心的に見ていくことになる。

## 継承をめぐる課題②：アーティストのモチベーションと継続性をめぐる問題

近年、アーティストやダンサーの中に民俗芸能にインスピレーションを得て自身の作品を作ったり、バレエなどの身体性に対して違和感を抱いて新たな身体のあり方を模索したりする動きは潮流として少なくないが、彼（女）らが1度だけ来て習い、オリエンタリズム的な読み込みの上でコンテクストを無視して自分の芸術の要素として取り入れてしまうだけで、全くその後の継承に結びつかないという場合も少なくない。古屋の六斎念仏の継承は、その意味ではむしろ稀に見るケースである。そしてそうしたタイプのアーティストが入り込んでしまう危険性について、武田・タカハシらにも危惧があり、むしろそうした形でのアーティスト側の民俗芸能の搾取につながらないような参加者のスクリーニング。そして継承者と他のアーティストを仲介する役割を担っている。西川や高島市教育委員会が常時継承の現場についていることはできない以上、そこでこの2人がその役割を自然と担うようになっていく。

アーティストが継承において重要な担い手となっている現状は、幾つかの観点から不安材料もある。第一に予算的な問題である。アーティストたちは基本的には助成金からのフィーを得ることで自分たちの生計を立てている存在であり、このプロジェクトのスタートも文化庁からの予算が獲得できたことがきっかけとなっている。アーティストたちの交通費や宿泊費といった支出もそうした予算から当然支出されている。そうした予算は基本的に単年度であり、いつそれが途絶えたとしても不思議ではない。特に2019年度までは、民俗芸能としての復活、アーティストという新たな担い手の参加、さらに孫世代による継承のスタートといった形で常に新たなトピックがあり、それにともなって注目も生まれ、補助金や助成金も付きやすい状態にあったが、今後はそうしたことは考えにくい。そのような中で淡々と継承していく中で、どういうふうには予算と担い手を確保していくのかは課題である。さらに当初から来ることが予定されているアーティストについては予算が付いていても、新たに参加するアーティストに関してはそれらは払われぬ。予算をめぐるアーティスト間でのヒエラルキーやコンフリクトが発生する可能性も、実際にこれまででも存在した。

もちろん、既に何年も来て担い手として定着しているアーティストらの多くは、単純に「予算の切れ目が縁の切れ目」と割り切れるわけではない。むしろ「ゲストアーティストとか言われてても、習ってしまっただけで、おじいちゃんたちも労力割いてくれて習っちゃうと、じゃあ予算ないんで来ません、みたいな普通のアーティスト仕事みたいなのはできない」<sup>44</sup>と言わざるを得ない面もあるし、もともとがアーティストとして入ったわけではないとして、「お金をもらわなくてもそこに参入できるのであれば習いたい」<sup>45</sup>という者もある。しかし

<sup>44</sup> 武田・タカハシへの聞き取りによる（2018年11月16日）。

<sup>45</sup> 斉藤成美への聞き取りによる（2019年1月27日）。

アーティストたち自身もまた生計を立てていく必要がある以上、そうした善意や好奇心に頼るという仕組みは健全でもなく、また持続可能とも言い難い。

アーティストにおける継承がはらむもう一つの危険性は、そもそも地縁・血縁のない集落における慰霊ということもあって、身体技法の面のみに関心が偏りがちであり、本来はプロではない人々が行うことができるはずの民俗芸能に対するハードルを大きく上げてしまう可能性があるということであり、これも武田が強く意識している点である。そうした技術の高さが見る側、ひいては新たに参加する側にとっての新たな魅力となりうる可能性はありつつも、逆にそれ以前に感じられていた民俗芸能としてのあり方を変えることで、今後参加が期待される集落にルーツを持つ若い世代にとっては、それがハードルの高さになる。武田はこれについて、アーティストが自覚すべき点を以下のように述べている「わかりますもん。この人はアーティストだなんて。同じ振りでもそこにあるストーリーが流れるんですよ。確かにアーティストの振りは美しい。美しいけれど、美しいだけなんです。そこが民俗芸能とはやっぱりちょっと違う。だから僕は民俗芸能アーカイバーにとどまっている。それをいかに自覚できるのかってのが結構大事。所詮というか、流れ者みたいな。そこは結構自覚した方がいいんじゃないかなって思いますね」<sup>46</sup>と述べている。武田はこのように自分の身体において芸能のアーカイブを蓄積する「民俗芸能アーカイバー」として位置づけつつ、あくまでその芸能の当事者というよりは、自覚的にその継承をサポートし、その役割が終わった場合は離脱するという可能性もありうる（したがって保存会には入らない）という立場を維持し続けている。

この点はアーティストたちの中でも立場の違いがあり、タカハシのように保存会には行って継承主体の一員となろうとする者や、斎藤のように今後も継続して通うという者もいる。しかしながら本来的には「家」の慰霊という意味合いを持たないアーティストたちにとっては、その動機はまず第一には身体技法に対する関心、そして第二にはそれを越えた継承者たちとの密接な関係性、第三に継承者たちが伝えてきたもの新たに参加する人びとに伝えることへの責任感にある。現在の継承者たちが引退し、またやがて亡くなったときに、アーティストたち自身にとってこの行事における芸能を継承する意味がどのように定位されるのかは大きな問題だといえるだろう。

## 5. おわりに

ここまで祝島の神舞および朽木古屋の六斎念仏における仲介者の役割と移住者・アーティストといった外部からその継承に参加した人びとの状況について論じてきた。またその過程において祭礼・民俗芸能にとどまらぬそれぞれの集落における移住者・アーティストの集落における役割についても分析を行った。

祝島については、移住者たちの移住プロセスや定住プロセスの連関、移住者がどのようにして村落に移住することになったのか、移住先でどのようにして生計を立て、コミュニティの一員として認められているのか、さらに移住前に培っていた人間関係や社会的ネットワークが移住後にどのように活用されているのかについて明らかにした。そのことによって、現代の農山漁村において移住者が生活して生計を立てていく上では、伝統的な地域社会の

---

<sup>46</sup> 武田・タカハシへの聞き取りによる（2018年11月16日）

社会関係への埋め込みと同時に、個人化・流動化した現代社会における社会的ネットワークを保持し続けて活用することが不可欠であること、またそうした社会的ネットワークがあるからこそ、伝統的な村落のライフスタイルを維持していくことができることが明らかになった。祝島の場合、原発問題に関する相互のシンパシーが基盤にあることが住民と移住者の間の関係性をつなぐ上で大きな意味を持っているが、そこでの仲介者の役割の重要性は明らかだ。祭礼はそうした移住者たちの能力、技能、性格などが露わになる場でもあり、また仲介者がそこで意図的にそれぞれの力を発揮、披露させ、またあえて意図的に中心的な役割をやらせることを通じて技能を継承させるような場として極めて重要なものがあった。

古屋の六斎念仏の継承は、アーティストたちによる継続的な参加という、全国的にもかなり珍しい事例である。アーティスト側からの民俗芸能への関心は2010年代以降、一定の広がりを見せつつあるが、このように継続的な形で継承に関わるとともに、また次世代の育成も含めた指導役も含めて務めるようになった状況はまだ稀である。教育委員会や「朽木の知恵と技発見プロジェクト」のような移住促進の立場から望ましいのは、六斎念仏に限らず集落の伝統文化を受け継ぐような孫世代の「孫ターン」や、アーティストの移住であるが、特に後者については今のところそれは困難と言える。アーティストたちも民俗芸能の継承に限らず各地で助成を得てさまざまな活動を行うことを通じてその生活基盤を成り立たせているのであり、その意味では個人化・流動化したライフスタイルに依拠している。またそうしたライフスタイルゆえに新たに他のアーティストを芸能の担い手として呼び込むことができる。またそうしたアーティストによる工夫を通じて古曲や「山」といった形での伝統の(再)構築も行われている。その意味でも祝島と同様に、社会関係の個人化・流動化が個人化・流動化が、伝統的なコミュニティを破壊するというものでは必ずしもなく、むしろ逆に伝統的なコミュニティの存続・継承を可能にする可能性を見ることができた。

残念ながら2020年については神舞も、また六斎念仏もコロナ禍によって中止になっている。このため2020年1～4月にかけての準備状況を調査しまとめることはかなわなかった。またアフターコロナ/ウィズコロナの状況においていかに祭礼や民俗芸能をこのような形で継承しうるのかは大きな課題である。これらについては今回のさらなる調査を行うことで研究の発展を期したい。

#### 参考文献

相川陽一,2016,「現代山村における地域資源の自給的利用と定住促進の可能性」『年報村落社会研究』(52)、農山漁村文化協会:145-182

秋津元輝,2009,「集落の再生に向けて:村落研究からの提案」日本村落研究学会・秋津元輝編『年報村落社会研究』(45)、農山漁村文化協会:199-235.

朝日新聞山口支局(編著),2001,『国策の行方:上関原発計画の20年』南方新社.

鯨坂学・河野健男・松宮朝,2016,「人口減少地域における定住促進施策とIターン移住者の動向」『評論・社会科学』(117):1-94.

Benson, M.,2009, A Desire for Difference: British Lifestyle Migration to Southwest France. in Lifestyle Migration: Expectations, Aspirations, and Experiences, eds. Michaela Benson and Karen O'Reilly, 121-135. Farnham: Ashgate.

Benson, M.,2016, Deconstructing belonging in lifestyle migration: Tracking the

- emotional negotiations of the British in rural France, in *European Journal of Cultural Studies* 19(5):481-494.
- Dusinberre M.,2012, *Hard Times in the Hometown: A History of Community Survival in Modern Japan*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 原(福与)珠里,2002,「新規参入者のサポートネットワーク」『村落社会研究』8(2),24-35.
- 平井太郎・曾我亨,2018,「地域おこし協力隊の入口・出口戦略(全国版)」『人文社会科学論叢』(5):275-313.
- 堀内和恵,2016,『原発を止める島：祝島をめぐる人びと』南方新社.
- 上関町史編纂委員会,1988,『上関町史』上関町.
- Mantle P., and Rausch A.S.(eds), 2011, *Japan's Shrinking Regions in the 21st Century*, Amherest, New York: Cambria Press.
- Mataritta-Cascante D., 2017, Moving the amenity migration literature forward: Understanding community-level factors associated with positive outcomes after amenity-driven change, in *Journal of Rural Studies*(53):26-34.
- Mataritta-Cascante D. and Stocks G.,2013, Amenity migration to the global south: Implications for community development, in *Geoforum*(49):91-102.
- McDonald K., 2002, From Solidarity to Fluidarity: Social Movements beyond 'Collective Identity': The Case of Globalization Conflicts, in *Social Movement Studies* 1(2): 109-128.
- 水野一晴・藤岡悠一郎編,2019,『朽木谷の自然と社会の変容』海青社.
- 武藤大祐,2017,「アーティストが民俗芸能を習うということ：『習いに行くぜ！東北へ！！』の事例から」『群馬県立女子大学紀要』(38):211-220.
- 武藤大祐,2018,「舞踊の生態系に分け入る：ショーネット・ヒューズと柿内沢鹿踊」『群馬県立女子大学紀要』(39):157-174.
- 武藤大祐,2019,「限界集落の芸能と現代アーティストの参加：滋賀県・朽木古屋六斎念仏踊りの継承プロジェクト」『群馬県立女子大学紀要』(40):181-198.
- 長友淳,2013,『日本社会を「逃れる」：オーストラリアへのライフスタイル移住』彩流社.
- Nagatomo, J. ,2015, *Migration as Transnational Leisure: The Japanese Lifestyle Migrants in Australia*. Leiden; Boston: Brill.
- Nagatomo, J. ,2016, Cultural Practices of Traditional Performing Arts by Lifestyle Migrants in Ama-cho, Oki Islands, Japan: Identity Politics and Cultural Practices of I-Turn Migrants as “Middlemen”, in *Journal of International Studies (国際学研究)* 5(1): 5-17.
- 西村利昭,2010,「若い世代の農村移住は簡単ではない」林直樹・斎藤晋『撤退の農村計画』公家委出版社:60-65.
- 小田切徳美,2014,『農山村は消滅しない』岩波書店.
- 小田切徳美・藤山浩・石橋良司・土屋紀子,2015,『はじまった田園回帰』農山漁村文化協会.
- 小田切徳美・筒井一伸編 2016『田園回帰の過去・現在・未来：移住者と創る新しい農山村』農山漁村文化協会.
- O' Reilly, K and Benson, M.,2009, Migration and the Search for a Better Way of Life: a Critical Exploration of Lifestyle Migration, in *The Sociological Review* 57(4): 608-625.

滋賀県民俗文化財保護ネットワーク編,2017,『針畑の六斎念仏調査報告書』滋賀県民俗文化財保護ネットワーク.

Takeda S.,(forthcoming), The role of lifestyle migration for the continuation of village traditions, in Manzenreiter, Wolfram, Lützel, Ralph and Polak-Rottmann Sebastian (ed.), *Japan's New Ruralities: Coping with Decline in the Periphery*, Routledge.

山秋真,2013,『原発をつくらせない人びと：祝島から未来へ』岩波書店.

山戸貞夫,2013,『祝島のたたかい：上関原発反対運動史』岩波書店.